
翔平、うつつを抜かす

Rei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翔平、うつつを抜かす

【Nコード】

N6855Y

【作者名】

Rei

【あらすじ】

一人の男が打ち込む物を見つけて成長していく話が書ければと思います

始まりの午後（前書き）

まったり進行ですのでご了承ください

始まりの午後

「ふああああ・・・」

まるで今日という日が永遠に続くのが当たり前のように、ノンビリした昼下がりを過ごしていた翔平だった。

三本の木、やる気、根気、勇気、が欠落した日々を送っている。

なんとかコイツ（小日向 翔平）を立ち直らせてみようと、物語を紡いでみようと思う。

見た目普通、年齢20歳、正義感は強いがあまり考えずに動いてしまう癖あり。

人に嫌われることはないが、さりとしてモテるわけでもない。どこにでもいるな、こんな男。

「まああーた、こんなところでサボってるうー!」

美夏は翔平の頭を叩きながら横に仁王立ちしている。

「いてえな!なんだよ、美夏」

「なんだよ、じゃないでしょ!早く仕事しなさいよ」

(佐々木 美夏) 同じバイト先の女の子だ。

同じ歳、同じ部署、同じ時間帯で入ることが多い。

そして、オレの彼女だ・・・。

「休憩終わりでしょ。さっさと終わらせちゃってよ。今日は図書館行くんだから」

「へいへい・・・。めんどくせ」

「ほら、テキパキ動く!」

美夏に追い立てられ、仕方なさそうに動き出す。

いつもと同じような光景。文具全般を扱う会社の受発注や店舗の在庫補充などを受け持っている。

実際、美夏がいないと回らないようなところもある。フロア責任者の近藤課長からの信任も美夏が厚い。

美夏も自覚してるのか、やけに張り切って切り盛りしているし、翔平としては従う一手だ。

「じゃ、さつさと終わらせて、事務所の絵里子ちゃんに会いにいこつかなつと」

「ハイハイ。せいぜい煙たがられない程度にねー」

「ベーツ」舌を出しながら美夏は忙しそうに立ち去った。

裏の倉庫整理を済ませ、店舗の品だしをしていると、西野 孝司が寄ってきて言った。

「今日終わったらメシ行かないか？」

手でグラスを空ける仕種だったので、何か話でもあるのかな、と気づいた。

「どこで飲むんだ？」

笑いながら返した。

「酔酔でどうだ？」

酔酔すいすいはバイト先から10分ほどの所だ。

「分かった。じゃ酔酔にバイト終わったらすぐだな。オレは5時までだが」

「オレも5時までには終わらせるから」

「おけ、じゃな」

西野は高校卒業後すぐ黒堂文具に就職し、今では受注主任として翔平たちバイトの管理をしている。

翔平は西野の紹介もあって今のバイト生活というぬるま湯に就いている。

ちなみに美夏は美大生とアルバイトの二足のワラジをしつかりと履いている。

ステップアップ?! (前書き)

6回ほど消えました
挫折しまくりです

ステップアップ?!

仕事をそつなくこなし、上がりの時間になった。

ぬるま湯のようなフリーター生活とは言ったが、翔平自身は割と気に入っている。文具は小さい頃から、定規やコンパス、下敷きに至るまで、新しく商品化されたものを見つけるとは楽しんでた。バイトの内容も、倉庫整理はつまらないと感じる事もあるけれど、陳列棚の商品を切らさないように補充するのは、売れ筋商品や数多くある商品のストックを把握し、発注しなくちゃいけない。倉庫整理をキッチリやっておかないと、何が何処にどれだけあるのか、把握出来ない。だからつまらないことも重要な事だとやっている。西野に人が足りないから、と誘われたものの、今ではやりがいを感じるようになっていた。

タイムカードを押して、更衣室で着替えていると、ドアの向こうで美夏の呼ぶ声が聞こえた。

「翔平ー」

仕事にミスはなかったはずだが、と思い返してみた。

今日は大丈夫、何もないはず。でも、少し躊躇した。が、ここにいるのは周知の事だから返事しない訳にもいかない。

「なにー」

「今日、酔酔行くんでしょ」
なぜか焦った。

「な、なんで知ってたんだよ」

「だって私も誘われたもの」

「西野のヤツ・・・」西野が美夏をなぜ誘ったのか思い当たらない。

「私、図書館寄って行くから少し遅れるって言うておいてね」

「なんで、その時言わなかったんだよ」

「だって、ちょうど近藤課長が通りかかったのよ。この間から西野君、課長に誘われてたでしょ。だからすぐ話終わって言いそびれたのよ」

そういえば、そんなこと言ってたな。課長と飲みに行くと、いつも愚痴ばっかで疲れるって。近藤課長はフロアマナージャーで西野の直近の上司だ。だから、最近は母親の体調が良くないからって誘いを断ってるらしい。

それもどうかと思うが、確かに課長と飲むのは御免こうむりたい気はする。

「わかった。言うておくよ」

「じゃ後でね」

「おう」

まあ、美夏を敬遠する理由もないので、微妙な気持ちは忘れて、更衣室を出た。

さて、酔酔に向かうかな、と時計を見ると5：15を指していた。このまま向かえば半には着いてしまう。

「西野はちゃんと終われるのかな」

そう考えたのと同時に、ジョッキに生ビールが頭をよぎった。

その瞬間、自転車に飛び乗っていた。

ドアにまだ、準備中の札がかかっていた。6時開店なので当たり前なのだが、翔平は気にせずドアを開け店内に滑り込んだ。

「クニちゃん！ビール！！」

入るやいなや、叫んだ。

「なんだ、翔平か」

特に驚くこともなく、酔酔のマスター、堂前 邦広は仕込み作業を続ける。

「今、手離せないから自分で入れろ」

ぶっきらぼうに言った。

「ハイハイ・・・」

翔平も勝手知ったるなんとやら、で、手慣れたようにサーバーから

ビールを注いでいる。

まず、ジョッキを半分くらい一気に飲み干す。

「ぶふうー！うめえ！」

「バイト上がりか？」

マスターが言った。

堂前 邦広はこら辺では、結構ヤンチャで有名だった男だ。翔平のいとこの兄ちゃんが邦広と同級でつるんでいた。そんな関係もあって、小さい頃から翔平のことを弟分のように目をかけていたのが、今に至る。

邦広曰く、翔平はよくムキになるのが面白くて、よくからかったが、当時の邦広達に、そんな風に向かって来るヤツもいなかったので、特に可愛がったのだそうだ。実際、根性もあつたらしい。

若くして酔酔を経営することになったが、翔平も本当の兄貴のように思っている邦広の開店とあつて、よく手伝つたり、逆に邪魔するとも言えるかも知れない活躍をしている。

「終わつてすぐにチャリ飛ばしてきたよ」

翔平が笑いながら言った。

「今日は美夏ちゃんは？」

「後で来るよ。図書館寄つてから来るつてさ。それまでもっと飲んどかなきゃ」

美夏は、さすがに翔平を飲み過ぎないように制限する。なので自由に飲めるのは、美夏が来るまでの間だと、翔平は真面目に思っているらしい。

ジョッキを空けるペースが上がった。

「飲むのはいいけど、暴れんなよ」

邦広に釘を刺されて、ムツとしながら

「暴れたりしねーよ。寝ちやうかも知んないけど」

よく飲み過ぎて閉店まで酔い潰れている翔平だった。

書く時間も気力もない……

二杯目を飲み終える頃、西野がやってきた。

「こんばんはー」

6時前だったので恐縮しながらドアを開けていた。

「おう。西野くん、飲み物は翔平に入れてもらえ」

「すみません、開店前に……」

「いいさ、お前らは特別だ。よく世話になってるからな」

実際、西野もココでアルバイトのように使われることがある。ちやんと役立っている所が翔平とは違うところである。

「よう、ちゃんと終われたんだな」

翔平が労うように言った。

「ああ、半分逃げて来たようなもんだけどな」

笑いながら西野が言った。

「生か？」

「ああ、それでいい」

翔平がサーバーからジョッキに注ぐ。

「あれ？美夏ちゃんは？」

「図書館寄ってから来るってさ」

ビールジョッキを西野に渡しながら言った。

西野は受け取ると、

「そうか。じゃ先に飲ませてもらうかな。お疲れ」

翔平とジョッキを合わせて、一気に半分以上飲み干す。

「ふううー、うめえ」

気付くと翔平は邦広の隣でツマミのタコ刺身と軟骨カラアゲを作っていた。

西野は笑いながらそれを見て感心するように言った。

「ほんと、お前は器用なヤツだよなあ」

「ん？そうか？」

翔平はあまり気にせず、出来上がったツマミをカウンターに並べて座り直し、ジヨッキを手にとった。

「美夏ちゃんが来てから言おうと思ってたんだが、少し話があつてね」

真面目な顔で西野が話し始めた。

「何かあったのか？美夏にも関係あるのか？」

西野の様子からはどんな話なのか、想像がつかない。美夏も同席することが余計に分からない。

「いや、美夏ちゃんには直接関係はないんだが、いや、んー、関係ない事もないか・・・」

西野が首をかしげて考えている。

「会社の事なんだ」

西野は真っ直ぐ翔平を見て言った。

「会社？」

「実は、オレ異動になるんだ」

「え！？」

「開発部に行くことに決まったんだ」

「おお、行きたいって言うてたじゃないか！やったな、おい！」

「ああ、希望が通ったんだ」

「そうか、よかった、おめでとう」

「ありがとう。それはよかったんだが、で、今の部署に空きが出るだろ、だから、お前やらないか？」

「え??？」

「いや、近藤課長も言ってるんだよ、お前がその気なら、社員に採用しようかって」

「ちよ、ちよっと待てよ、、いきなりそんな事言われても、、」

翔平は急な展開に面喰らって、あたふたしている。

「だから、美夏ちゃんにも聞いてもらっておこうと思ってな」

「あ、ああ、そういうことか」

なぜココに美夏も呼んだのか、その理由は納得できた、が、まだ社員登用のことは整理出来ていない。

「まあ、今決める事じゃないから、ゆっくり考えればいい。多分、来週あたり、近藤課長から話があるだろうから、前もってオレが話してるだけだ」

書く時間も気力もない・・・(後書き)

かなり進行が遅れそうですorz
疲れが・・・

休みの間に進められるだけ進めたらいいなあ

西野の話がまったくの想定外だったことで、一気に酔いが冷めた。

「ゆっくりって・・・」

翔平はボーゼンと西野を見て言った。

「社員なんて考えた事もないし、今の生活をどう変えたいとか考えた事もなかったし、正直、やりたい事が見つからないからアソコにいるんだよ」

西野も翔平の性格は分かっているつもりだ。あまり押しても逆効果なのは分かっているので、あえて説得もしない。

「そうか。まあ、社員になるのがイイとは思わないから、お前の思うようにしたらいいと思うよ。まあ、考えるのだけはしてやってくれよ」

「ああ・・・」

ジヨッキに半分残っていたビールを一気に飲み干し、やや斜め上をボーッと見つめる翔平だった。

「社員とかムリ。責任とかムリ。ホントにヤリタイ事ってなんだろう」

そんな時、美夏がやって来た。

「クニさん、こんばんはー」

急いで来たのか、少し息を切らせている。

「よー、美夏ちゃん。いつも可愛いね。翔平にはもったいないなあ。邦広が軽口を叩いたが、翔平は反応出来なかった。

「やだーマスター、そんなホントの事言ったら翔平可哀想でしょー」
美夏は二人の会話を知らないので軽口で返した。

翔平がハッと気づいて

「あ、美夏。来てたんだ」

「なによ、それ！」

美香は少しムツとしたように言ったが、西野が素早く目配せしたのを見逃さなかった。

「急いで図書館言ってきたのよー。翔平、飲み過ぎてないでしょうねー」

笑いながら空気を読んだ。

「あ、ああ、まだ一杯目だよ。な、西野」

翔平が慌てて同意を求めるのが可笑しくて、笑いを堪えながら

「あ、ああ。まだ一杯目だよ」

と、美夏に翔平が気づかない方の目でまた目配せしながら言った。

「ならいいけど。じゃ私もビール飲んじゃおっかな」

「お、おう、任せとけ」

なぜか、翔平は焦りながら美夏のビールを入れに行った。

翔平が離れた隙に、西野は美香に早口で話した。

「ウチの会社が、翔平を社員にすることになって話があつて、今それ伝えるところなんだよ」

「え！ホントに?!」

「ああ。だから、今ちよつと動揺してるみたいだ」

美夏は、それだけ西野から聞いただけで、大体の状況をのみ込んだ。

翔平がジョッキを持って美夏の前に置くと、美香が言った。

「ありがと、翔平。じゃ乾杯しようか」

美香が明るく言う。

「あ、でも何に乾杯する?」

美香が二人を見回して言った。

翔平がそれに応えて

「そつだ！西野の転勤、栄転が決まったんだ、それを祝おう」

「え！西野くん、転勤なの?!」

「ああ、そうなんだ」

西野が笑顔で答えると

「とりあえず、乾杯しようぜ!」

翔平が急かした。

「そうね」

「じゃ西野の栄転を祝って、カンパーイ！」
三人はジョッキをぶつけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6855y/>

翔平、うつつを抜かす

2012年1月9日00時53分発行